

河内全

廣津柳浪著

河内屋

柳
浪

明治三十九年五月廿九日印刷
明治三十九年六月一日發行

河内屋

實價四拾錢

著 作 者

廣 津 直 人

發 行 者

東京市日本橋區通四丁目五番地
和 田 む 光

印 刷 者

東京市京橋區南小田原町三丁目九番地
中 野 鐵 太 郎

發 行 所

東京市日本橋區通四丁目角
春 陽 堂

印 刷 所

東京市京橋區發地三丁目十五番地
帝國印刷株式會社

電話本局五十一番



柳

浪

(一)

神田明神下かんだみやうじんしたに間口五間まぐちけんを千本格子せんぽんかうし、軒洋燈のきあかりには河重瀬戸かはぢゆうせとの表札へうさつには鈴木重吉すいきぢゆうきちとした、目めにつく家構かまへの玄ゑ、ふた、家が
ある。

一昨年おとしまでは横山町よこやまちやうに糸店いとみせを張はつて居ゐたとやらで、此地こちへ移うつつて來たのは去年きよねんの三月ぐわつである。家内かないは主あるじの重吉女ぢゆうきちによう

房のお染、重吉の弟の清二郎、仲働のお花に下女のお吉を合せ五人暮である。重吉は或保険會社の重役と云ふ事で、町内の小若の連中が資産家に數へて、五本の指に加れて居るのである。

清二郎は明神の石阪下の角で人車を下り、屈詫顔をしながら我家を指して歸つて來た。途端に入口に列んだ露路から出て來たのは仲働のお花である。清二郎は隙さずお花を呼び止めた。

『おや、お歸宅で御在ますか。』

清二郎は軽く點頭き、右の拇指を出して見せて、『在宅か

う。

「旦那さまですか。」

「さうさ。一昨日から未だ歸宅らないんぢやないか。」

「左様で御在ます。」とお花は眉根を顰せたが、忽然莞爾笑ひ、「貴郎もお酷いぢやアありませんか。結局お歸宅なさらないんですもの。御新造さんが十二時までも待つて居らつしやつたんですよ。」

「え。さうか。嫂さんが十二時まで。そりやお氣の毒な。」
と、清二郎は愁然として、「家兄さんにも困るぢやないかなア。」

「ほゝほゝ。清さまにも困るねえと、御新造さんが熱く云つて居らつしやいましたよ。昨夜は何方へ行らつしやい

ました。』とお花は笑を含んで調戲氣味である。

『昨夜。』と、清二郎は莞爾したが忽ち又愁然として、『嫂さん心配させちやア濟まない。つひ外泊様な事になつて

……お前は使に行くのかい。』

『はい。御新造さんのお薬を買りに参りますので。』

『え、嫂さんの薬。』と、清二郎は吃驚しながら、『如何かあるのかい。寢てでも居なさるのかい。』

『はい。旦那さまや清さまが御病氣になすつたんで御在ますのさ。御心配ばッかしお掛けなさるんですもの。』

『そいつは困つた。早く薬を買つて来るが可い。ふーむ。』と、清二郎は覺えず嘆息する。

『早くお行でなすつて、御看病を爲てお上げなさいまし。』

清さまの御看病が御新造さんには……ほ、ほ、ほ、ほ。』

『何を、無益い。』と、清二郎は目を睨つた。

『まア彼様顔を爲すつて。ほ、ほ、ほ、ほ。私は早く参り

ませう。』とお花は急いで薬屋のある方へ行つて了つた。

清二郎はお花を見送りながら、『馬鹿な。何を聞嚙ヒッ

てるのか、時々怪しからん事を……。』と覺えず獨語を云

つて、又手嘆息して、靜かに格子戸を開けて内へ入つた。

* * * * *

お染は昨夜からの血の道のに今朝も今十時迄臥床を離れ

る事が出来なかつた。お花に賣藥を買はせに遣る序に、命
けたい用事を思出したので、お花くと呼んで見たが、既行
つたものか返事をせぬ。それとも聞こえぬのかと、又二三
度呼んで見たが、臺所に居る筈のお吉も返辭をせぬ。餘り
家内が空の様に思はれ、留守の自分の不行届の様な氣がし
て、心を勵しながら、漸く臥床から起上つた。

年弱の十九で、平生は十七位にしか見えぬのであるが、二
日二晩夫を待明したのと、生憎血の道が發つたので、色は蒼
く、眼は鋭く、髪は亂れて、廿歳を一つ位は上にも見える。元
來は柔和で、鼻も口も眉も生際も殆んど批を難たれず、並の
美人には妬るゝ程であるのに、今日は十段も醜い。秩父銘

仙の格子縞の寝衣に明衣を襲ね、薄色唐縮緬の細帶を前に
 結び、對丈ながら裾は足の甲に及び、瘦形で身材が高いので
 あるから形が如何にも好く見え、又如何にも哀にも見ゆる。
 お染は漸く臥床を離れ、お花を呼びお吉を呼びながら納
 戸へ來たけれども、お花は見えず、お吉も返辭を爲なかつた。
 長火鉢の平生坐る處に二ツに折つてあつた座布団を、お
 染は靜かに足の先で廣げて、膝を落した音の茶棚の瀬戸物
 に響く程力なく坐つた。

『お花は藥種屋に行つたんだらうが、吉は何處に居るのか
 ねえ。臺所にも居ない様だし、物置にでも行つてゐるのか知
 ら。』とお染は獨語を云ひながら柱時計を仰ぐと、十時を十

分ばかり過つて居る。嘆息しながら右の臂を火鉢に倚たせて頬杖を支き、左の手に火鉢雜巾を取つて、所在なさに銅壺を拭いたり火鉢の縁を拭いたり、無意味に見詰めながら同一事を繰返して居る。

お染が深く溜息を吐き、今度は火箸を取つて、灰に字を書いたり消したりして、顔色が愈よ面白くなく見えた時、二階を下りる足音が聞こえた。

『誰だらう。清さんは居なさらないし。吉が二階に行く譯はなし……』と、お染は次室を隔の唐紙を見詰めながら耳を傾けた。

『それとも、清さんが歸つて居なさるのか知ら。』

お染がまた呟いた時、静かに唐紙を開けた者がある。

『おや、清さんでしたかえ。何時お歸宅なすつて。』と、お染は平生の様には笑顔も見せず、昵と清二郎を見詰めた。

清二郎は淋しい笑を含みながら、長火鉢を少し離れて、お染に對して坐つた。

清二郎は二十二歳。小男ながら品格もあり、きちんと極つて居る中に何處にかのんびりした處もある。丸顔ともつかず、長顔ともつかず、頬に少し張は見えながら、鼻筋通り口元締り、濃過ぎる程の一の字眉細けれども長く清しい目、神經の鋭敏らしく見えるのが微瑕と云へば微瑕か。兎に角男らしい男に見える。結城紬の袷に、節米澤の羽織、紺無

地の博多帯に、黒の一本綾に黒八丈の裏をつけた蔽膝を締めて居る。

『まだお留守かと思つたら、何時お歸宅なすつたの。』とお染は又問掛けた。

『今鳥渡前に——鳥渡二階に行つて來たのですが……。』
 嫂さんが御病氣だと云ふ事ですから、何様かと思つて……。
 其様にして、まア起て居なさるんで、漸と安心しました。
 お花に今其處で聞いた時にや、どつと寢て居なさるんだと思つて、ひどく心配したんですが、其様でも無い様だから、まア可かつたですなア。併し、何ですぜ。顔色が餘り好くも無い様ですから、何なら寢て居なすつちやア如何でせう。

本統に顔色が不良いから、嫂さん寢てお居でなすつたら可
いでせう。』

清二郎が心配顔を、お染は静かに見返り、少しは笑顔のほ
の見え、『なに、其様でもありません。いつもの持病ですか
らね、其様に重症した事はないんですよ。寢て居る程でも
ありませんから、今起きて見た所ですのさ。お薬を二三服
も服くとね、いつでも直ぐに治るんですから。』と、微かに元
氣を復して、茶棚の急須を卸して、茶入の蓋を開けに掛つた。
清二郎は煙管を口にしながら、茶入の罐の蓋の堅いのを
見て、『嫂さんの力ぢや、とても開きさうにもない。私にお
貸しなさい。』と、吸殻を火鉢にはたいた。

『それでは憚りさま。』とお染は鑕を渡す。清二郎は苦もなく蓋を開けて遣る。早くも茶は入った。

『何にもお茶受が……。今お花に買らせ様と思つて、つひ忘れたものだから。何か無かつたか知ら。』とお染は茶棚の袋戸棚を開けて見る。

『なアに、嫂さんお茶受なさア能うがすよ。』と、清二郎は茶を飲みながら、お染の顔を睨と見ると、一入其顔色が悪い。氣の毒なのと心配になると、又勸告ずには居られなくなつた。

『嫂さん、本統に顔色が悪いですな。押したりしちや不可せんぜ、え。如何です、寝る事になすつちやア。』

『なアに。今朝の様だと、逆も起きては居られないけれども、もう快いんですから。寢て居るよりか起きてる方が、些とは氣も紛れる様でね。』

『可いんですか。大丈夫ですか。本統に色が悪いんですかな。』

『なアにね、顔色の悪いのはね、昨夜と一昨夜と睡なかつたもんだから……。』とお染は云掛けて、茶の溢れた盆を拭いて居る。

清二郎は氣を打れて何にも云ひ得なかつた。少時して僅かに膝を進めて、『お花に聞くと、家兄さんは昨夜も歸宅なかつたさうですな。』

『そりや詮方がありませんよ、私が行届かないのだから。
私はお留守にばかりなすつたつて、其をお怨みとも思はな
いんですがね、萬一間違でもあると、申譯がありませんか、
それで實に心配で、如何しても寢られませんの。清さ
ん、貴郎でも居て下さると、何様に氣強いか知れませんか。
昨夜は清さんもお居でなさらないし……』と、お染は怨
み顔に清二郎を見たが、垂頭き氣味になつて、簪で頭の中を
搔いて居る。

『は、は、は、』と、清二郎は態とらしく笑つて、『私が居
たつて、此意氣地なしぢや、盜賊でも入らうもんなら、一番に
逃出さない代りに、腰でも抜すのが落かも知れない。は、